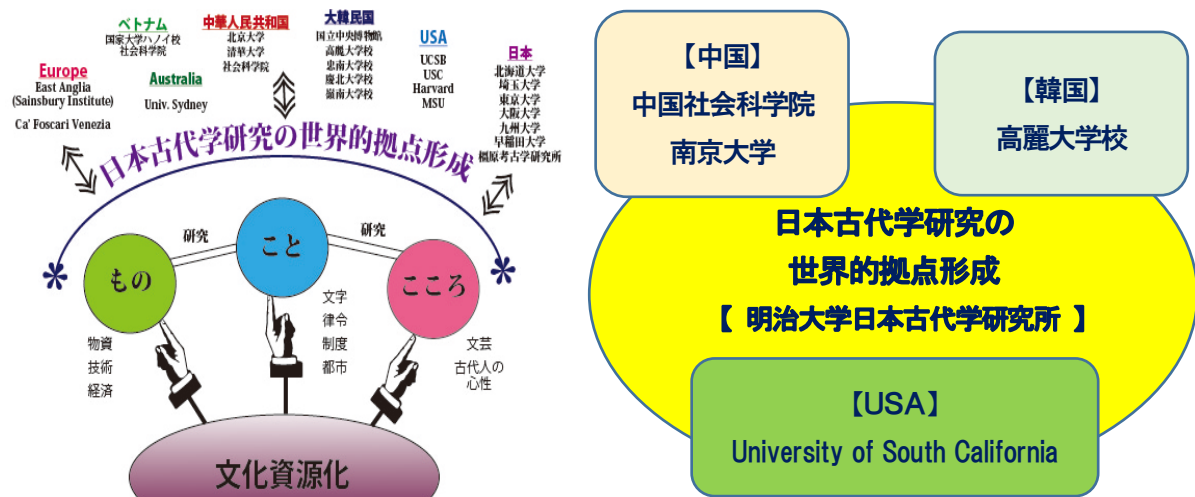


4. 海外の研究組織・研究者との研究交流の恒常化

(1) 海外の研究組織との研究交流の重点化・恒常化

2004年に日本古代学研究所を開設して以来、アジアおよび欧米の研究組織およびそこに所属する日本古代学研究者との交流を重ねてきた。10年にわたるその蓄積をもとに、毎年相互に学術交流する研究組織を重点化し、さらに随時相互に学術交流を重ねる組織を併せることによって、〈日本古代学研究の世界的拠点形成〉の重点化と今後の拡充への施策とした。

重点化した海外研究組織は、中華人民共和国の中国社会科学院・南京大学、大韓民国の高麗大学校、アメリカ合衆国の南カリフォルニア大学である。また、学術交流研究組織は、中華人民共和国の北京大学・精華大学・上海博物館、大韓民国の国立中央博物館・忠南大学校・慶北大学校・釜山大学校・国民大学校、台湾の台湾師範大学、ベトナムの国家大学ハノイ校・社会科学院、アメリカ合衆国のハーヴァード大学、オーストラリアのシドニー大学などであり、随時研究者の招聘等の交流を行っている。



【 図Ⅱ - 4 - 1 日本古代学研究の世界的拠点形成と重点化 】

本研究期間である5年間における重点研究組織との交流実績については以下の通りである。

【中国社会科学院】

中国社会科学院は、中華人民共和国における哲学社会科学の最高学術機構であり、明治大学とは組織間の学術交流を重ね、2018年度には中国社会科学院大学大学院との教育協定も締結して、研究と教育の両面での交流を蓄積している。明治大学日本古代学研究所では、中国社会科学院の中でも考古研究所・歴史研究所・近代史研究所・世界歴史研究所の4研究所との学術交流を重ねている。特に、世界歴史研究所の徐建新氏は、高句麗広開土王碑の研究によって明治大学で博士学位を取得しており、考古研究所前所長の王巍氏や現副所長の朱岩石氏など、歴史研究所の黄正建氏、近代史研究所長であった故・歩平氏らとは明治大学日本古代学研究所としてたびたび学術交流の機会をもってきた。

本大型研究においても、テーマ2において、20世紀における東アジア古代史研究の議論において極めて重要な位置を占める高句麗広開土王碑の総合研究を進めており、徐建新氏と共同で高句麗・輯安の現地調査を行うなど、研究交流には厚みがある。また考古学分野では、日本列島の弥生～古墳時代およ

び古代の歴史動向を的確に理解するのは、朝鮮半島さらには中国本土の各地の考古資料を正確に把握する必要があり、中国における最高学術機構であると同時に行政的にも中枢の位置にあることから、中国社会科学院との学術交流は必須のものである。過去5か年の学術交流会は下記の通り3回行っており、2019年8月下旬にも北京において交流会を開催するべく準備中である。

- ・2015年11月2・3日：『中日交流與中日關係的歷史考察學術研討解（第5届）』（於：中国社会科学院近史研究所學術報告庁）
- ・2016年10月28日：中国社会科学院世界史研究所との研究交流会、（於：世界歴史研究所）
- ・2018年3月21日（水）9：30～17：15、明治大学・中国社会科学院学術交流会『古代における日中交流』（於：明治大学・グローバルホール）



【 図Ⅱ - 4 - 2 中国社会科学院との学術交流： 左：2015年北京，右：2018年東京 】

【南京大学】

南京大学は中国南部における考古学・歴史学・文化遺産学の研究拠点であり、南京大学文化与自然遺産研究所所長を務める歴史学院賀雲翱教授を中心として、学術研究・教育交流を重ねている。賀教授は、南朝代前後の都城および出土文物、および文化遺産の総合的研究を牽引する優れた研究者である。明治大学日本古代学研究所では、過去5年間では2014年と2018年にお招きして調査研究の成果をご講演いただき、また毎年のように石川日出志・加藤友康ほかが南京大学を訪問し、相互に学術交流を重ねている。石川代表は、本研究において、「漢委奴國王」金印を検討するために中国古代の印の考古学的検討を進めたが、中国側の資料調査や研究者の紹介にも、賀教授の助言・支援に負うところが大きい。また、毎年賀先生が指導される大学院生を明治大学に受け入れ、明治大学学生も南京大学を訪問するなど、次世代を視野に入れた交流を行っている。

- ・2014年7月25日：公開研究会『中国の文化遺産学－文字資料を中心として－』（於：明治大学グローバルフロント1F・グローバルホール）、招聘者：賀雲翱（中華人民共和国・南京大学教授）
- ・2017年11月2日：南京大学・明治大学学術交流会＜東亜歴史与考古＞、（於：南京大学仙林校区歴史学院院會議室・仙1-108教室）、研究報告：石川日出志・加藤友康
- ・2018年7月26日：公開講演会『中国における日中交渉史上の考古学的新発見!?!』（於：明治大学グローバルフロント1F・グローバルホール）招聘者：賀雲翱（中華人民共和国・南京大学教授）
- ・2018年11月2日：南京大学・明治大学学術交流会＞、（於：南京大学仙林校区歴史学院328報告庁）、研究報告：石川日出志・加藤友康



【 図Ⅱ - 4 - 3 南京大学との学術交流： 左：2017年南京大学，右：2015年南京大学 】

【高麗大学校】

高麗 (Koryo/Korea) 大学校は、大韓民国のソウルに所在するソウル (Seoul) 大学校・延世 (Yonsei) 大学校とともに“SKY”と呼ばれる名門総合大学である。高麗大学校と明治大学とは2008年度から学術研究・教育交流を実施・継続している。研究交流行事もしくは国際学術会議の名称で、毎年1～2回の行事を実施している。交流先は文科大学大学院の韓国文学専攻・韓国史学専攻であり、日本文学専攻・日本史学専攻との交流ではないところが本交流の特色である。日本における日本文学・日本史学の研究拠点海外において日本文学・日本史学を研究する部門と連携・協力することは多々見られる。しかし、日本文学・日本史学の研究者が韓国文学・韓国史学の研究者と10年以上に渡って交流している事例は他にないと思われる。高麗大学校の韓国文学専攻・韓国史学専攻は長年にわたって競争的研究資金「BK (Brain Korea) 21」を獲得して、研究教授を多数雇用し、韓国文学語学研究教育団・韓国史学研究教育団を組織している。教授以下の教員スタッフ、およびそこで学ぶ大学院生の数と質は韓国国内でもトップレベルにあると言える。

あえて韓国文学・韓国史学専攻と交流する理由は、これまで国民国家単位で研究されてきた「国文学」「国史学」を相対化するためである。それぞれの研究の目的・方法を発表し合うことで、今後の文学・史学研究のあり方を模索している。明治大学文学部では2005年度から2017年度まで高麗大学校文科大学専任教授を客員教授として招聘して教育・研究交流を積み重ねており、これらによって国民国家の枠にとられない文学研究・史学研究の目指す教員・大学院生の研究が次々と登場してきている。

日本古代学研究の世界的拠点形成という面では、東アジアの文献を視野に入れた日本古代心性研究を進めてきた。その際、これまでほとんど注目されてこなかった韓国漢文小説を読解し現代語訳を進めた。日本古代の心性の特色を東アジアの中で浮かび上がらせるためである。この韓国漢文小説の読解のために、高麗大学校の教授陣から資料提供、読解のための助言、研究情報の提供をもらっている。以下は研究期間に実施した行事である。

- ・2014年9月11日： 第5回高麗大学校・明治大学国際学術会議「歴史と文学を通してみた東アジア」、(於：韓国・高麗大学校韓国学館会議室B101)
- ・2015年10月23日： 第6回明治大学文学研究科・高麗大学校文科大学国際学術會議、(於：明治大

学)

- ・2016年9月7日： 第7回明治大学・高麗大学校国際学術会議, (於：高麗大学校韓国学館会議室)
- ・2017年9月8日： 第8回高麗大学校・明治大学学術交流行事 (於：高麗大学校民族文化研究院大会議室B203)
- ・2018年9月5日： 第9回高麗大学校・明治大学国際学術会議 (於：韓国・高麗大学校民族文化研究院B203)



【図Ⅱ-4-3 高麗大学校民族文化研究院での学術交流会 (左：2018年度, 右：2017年度)】

【南カリフォルニア大学】

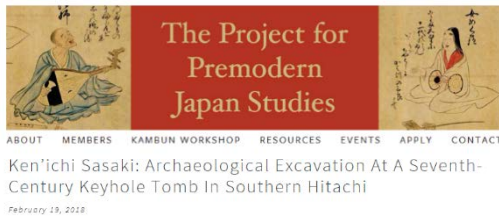
南カリフォルニア大学は、アメリカ合衆国における日本学研究の中核的な位置を占めており、南カリフォルニア大学史学科ジョーン・ピジューJoan R. Piggott 日本古代史担当教授, 同日本古代史担当研究員ジャネット・グッドウィンJanett Goodwin 博士, 比較文学科日本中世文学担当ジェイソン・ウェブJason P. Webb 准教授, 宗教学科日本中世宗教史担当ローリー・ミークスLori R. Meeks 准教授と充実した陣容を誇っている。例えば、ピジュー教授は北アメリカで唯一の、そして英語圏全体で2名しかいないうちの一人の日本古代史を専門にする専任教員である。また北アメリカには、室町時代以前を専門にする研究者は少数で、ウェブ、ミークス両准教授の貢献も大きい。そのため、北アメリカ圏を対象とする日本学セミナーも継続的に行われている。

本研究メンバーの多くが、本大型研究発足以前から、上記専任教授らと恒常的に研究交流を行ってきた。分担者佐々木は毎年、吉村、加藤、牧野も2~3回、南カリフォルニア大学で研究発表やワークショップを行っているし、ピジュー教授、ウェブ准教授も明治大学で研究発表を行っている。また2017年にポルトガルのリスボンで開催されたヨーロッパ日本学会では、ウェブ准教授が立ち上げた「日本史における時代区分論」と題したセッションで、吉村、加藤、佐々木が研究発表を行った。英語圏における日本研究は、ピジュー、ウェブ、ミークスの専門が皆違っても共同研究しているように、もともと学際的であるため、本大型研究もそれを範にとっている。

なお、J. R. Piggott 教授は、明治大学日本古代学研究所の客員研究員として共同研究を行っている。

- ・2014年12月3日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学).

- ・2016年3月17日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学).
- ・2016年3月16・17日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学).
- ・2018年2月15・16日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学).
- ・2018年11月2・3日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学).



【図Ⅱ－4－4 南カリフォルニア大学USCでの研究交流 左：2018年，右：2017年

J. R. Piggott 教授HP (www.uscppjs.org/uscmeiji-university-exchange/) より】

(2) 国際学術研究会等の開催

①. 国際学術研究会『交響する古代』の毎年開催

本研究では、3つのテーマに基づく研究成果を報告・議論して総合化すること、および国内外の日本古代学研究者を招聘して国際学術研究会『交響する古代』を毎年開催することをとおして<日本古代学研究の世界的研究拠点形成>に資する取り組みとした。海外からの研究報告者（日本国内研究組織所属を含む）は次の通り（研究報告の論題は「Ⅲ. 研究成果（2）」参照）。

黄正建（中華人民共和国・中国社会科学院），賀雲韜（中華人民共和国・南京大学），陳登武（中華民国・台湾師範大学），沈慶昊（大韓民国・高麗大学校），鄭雨峰（大韓民国・高麗大学校），申敬澈（大韓民国・釜山大学名誉教授），ジェイソン・ウェブ（USA・南カリフォルニア大学），ジャネット・グッドウィン（USA・USC東アジア研究センター），ヨーゼフ・クライナー（ドイツ・ボン大学名誉教授/Josef Kreiner），ヨハネス・ヴィルヘルム（オーストリア・ウィーン大学東アジア研究所），井川史子（Canada McGill University），シュタイネック智恵（チューリッヒ大学東洋学科日本学部・法政大学国際日本学研究所），金文京（京都大学名誉教授・鶴見大学），Robert F. Wittkamp（ドイツ・関西大学），マイケル・ワトソン（明治学院大学・PMJS），ブルース・バートン（桜美林大学），カール・フライデー（埼玉大学人文社会科学研究科教授）

- ・2016年1月20・21日： 国際学術研究会『交響する古代VI—古代文化資源の国際化とその意義—』（於：明治大学グローバルフロント1F多目的室），

- ・2017年1月13日・14日： 国際学術研究会『交響する古代Ⅶ—全体テーマ：古代文化資源の国際化とその意義 vol. 2—』, (於：明治大学 グローバルフロント 1F 多目的室)
- ・2017年11月30日・12月1日： 国際学術研究会『交響する古代Ⅷ 全体テーマ《古代文化資源の国際化とその意義 vol. 3》』, (於：11月30日：アカデミーコモンA5・6会議室, 12月1日：明治大学 グローバルフロント1F多目的室)
- ・2019年1月12日・13日： 国際学術研究会『交響する古代Ⅸ』, (於：明治大学 グローバルフロント1Fグローバルホール)

②. 国際学術研究会・講演会等の開催（於：明治大学）

①の本研究全体による統括的な国際学術研究会の他に、本研究にかかわる国際シンポジウムや研究会・講演会を開催して、日本古代学研究所の海外発信、研究交流の蓄積を図った。

- ・テーマ1：2015年11月27日： 『岡正雄シンポジウム“Origins of Oka Masao’s Anthropological Scholarship”』, (於：明治大学グローバルフロント1F・グローバルホール).
[海外等からの報告者等] Josef Kreiner (ドイツ・ボン大学名誉教授), Wolfgang Marschall (スイス・ベルン大学名誉教授), Andreas Schirmer (オーストリア・ウィーン大学助教), 全京秀 (大韓民国・ソウル国立大学校教授), Sepp Linhart (オーストリア・ウィーン大学名誉教授), Hans Dieter Olschleger (ドイツ・ボン大学准教授)
- ・2019年2月23日(土)10:00~18:00, 日本古代学研究所シンポジウム『社会変化とユーラシア東西交易—考古学と分析科学からのアプローチ』, (於：明治大学・リバティタワー1011教室)
[海外からの報告者等] ダニエル・シュタイニガー (ドイツ・ドイツ考古学研究所), 金奎虎 (韓国・公州大学校), 朴天秀 (韓国・慶北大学校)
- ・(関連事業) 2014年7月25日： 科研費基盤研究(A)「日本墨書土器データベースの構築」公開研究会『中国の文化遺産学—文字資料を中心として—』(於：明治大学グローバルフロント1階・グローバルホール) [海外等からの報告者等] 賀雲翱 (南京大学歴史学系)

③. 海外における国際学術研究会（関連事業）

- ・2015年9月10日： <第8回高麗大学校・明治大学学術交流行事 韓日文学歴史学の諸問題 (IV)>, 高麗大学校・明治大学大学院文学研究科, (於：高麗大学校民族文化研究員大会議室B203)
- ・2015年10月23日： 第六回明治大学文学研究科・高麗大学校文科大学国際学術會議, (於：明治大学)
- ・2015年11月2・3日： 中国社会科学院国際合作局・日本明治大学『中日交流與中日關係的歴史考察 学術研討解 (第5届)』(於：中国社会科学院近代史研究所学術報告庁)
- ・2016年3月17日： 南カリフォルニア大学USC Meiji Research Exchange, (於：南カリフォルニア大学)
- ・2018年3月21日： 明治大学・中国社会科学院学術交流会『古代における日中交流』, 主催：明治大学大学院・文学部, (於：グローバルホール)

(3) 海外籍研究者による研究支援

本大型研究発足時に、日本学の国際化に多大な貢献をしてこられたヨーゼフ・クライナー Josef Kreiner ボン大学日本学名誉教授も分担者にお迎えし、世界的拠点の形成にむけて、盤石の態勢を整えた。また、南カリフォルニア大学の J.R. ピジョー Joan R. Piggott 教授は、日本古代学研究所の客員研究員の立場として研究支援をいただいている。強調したいのは、日本研究の中で一番国際化が遅れているのが弥生時代以降室町時代以前の日本考古学・古代中世史の分野であって、本大型研究は、この国際化が著しく遅れている分野の国際センターとしての役割を担ってきた点である。おかげで、本大型研究の後半には英文で多くの研究成果を世に問うことができた。

本研究主催のものは *Origins of Oka Masao's Anthropological Scholarship* (2016) だけであるが、ピジョー教授の紹介で佐々木は *Routledge Handbook of Premodern Japanese History* (2017) の「古墳時代と国家形成」の小論文を執筆した。今や、海外の研究者にとって、日本古代学を研究するには明治大学が最高の環境を提供できるようになっている。

(石川日出志・佐々木憲一・牧野淳司)